空海の「声字実相」の世界

村上保壽

第一章　声字実相の「ことば」の意味
一　ことばの合意する問題
二　「声・字・実相」の意味
三　「声字と実相」の六離合釈
四　声字実相と智の問題
第二章　声字実相の存在論的意味
一　ことばと現象の世界
二　「内外依正」の世界観
三　「法然と随縁」の存在相
四　ことばと「能悟」の意味

第一章　声字実相の「ことば」の意味

一　ことばの合意する問題

われわれは、宇宙の真理・世界の本質を認識しようとするとき、一般にことばや概念をとおしてそれを行おうとする。しかし、われわれは、ことばや概念が必ずしも真理や本質それ自体を完全に反映しうるものでないことを知っている。一般に、人間のことばや概念による世界認識には限界があるのである。

世界認識のことばや概念は、その性質上、対象としての世界を論理的に客観化しようとする。しかし、対象世界を論理的客観的に明らかにしようとすればするほど、たとえそれが理性認識のことばや概念であろうとも、それによって世界や全体像はかえって遠のき、それらのことばの概念によって切り取られた一つの世界の断面のみがあざやかに提示されうるにすぎない。それと言うのも、ことばや概念あるいは論理や理性認識は、世界を必然的に一つの枠組にはめ込んで客観化せざるをえないからである。しかし、世界はその枠組の外に無限の大きさと広がりをもって展開している筈である。このような意味で、われわれがことばや概念の客観性を追求するとしても、かかることばや概念による認識によって、世界を全体的に把握することは不可能であると言わざるをえないのである。

近代の科学的合理的思考は、ことばや概念を理性的主体の側から規定し、その視野をとおして世界（対象）を捉えている。これが科学的合理主義的な知の視点である。しかし、この視点とはまったく異なる智の視座に立つとき、われわれは、論理的理性的認識の把握しえなかった世界の本質・真理へ迫ることができるのではないだろうか。この問いに対する一つの解答として、空海の『声字実相義』は、われわれに宇宙の真理、世界の本質を直接開示することのできる智の視座を与えてくれているのである。

「五大に皆響有り
十界に言語を具す
六塵に悉く文字あり

法身は是れ実相なり[1]」

作者の特定[2]は別にして、この頌が語りかける世界の大きさと広がりは、多少とも空海の思想に接している者にとって、空海自身の密教世界以外の何ものでもないことを感得させるのである。「五大に皆響あり」とその釈、すなわち「此の内外の五大に悉く声響を具す。一切の音声は五大を離れず[3]。」ということばは、詳細な考察を抜きにしても、空海にとって声や響が単なる世界認識のためのものではなく、世界全体と直接交渉するための何かであることをわれわれに感じさせてくれる。そして、世界自体の語りかけていることばこそが、世界の開示している絶対的真理そのものにほかならない、という空海の根本的確信をわれわれに気づかせるのである。

さらにこのことばは、この世界が単なる論理的認識や合理的証明では把握しえない世界であることを明らかにしている。この頌文は、そのような論理的合理的認識をはるかに超えた存在そのものの世界・法身仏の世界を予想させるとともに、声字においてその世界と一体化する智の悦びをさえ暗示しているのである。

それでは、空海の世界把捉のことばと概念、すなわち「声字」や「文字」が宇宙の真理、世界の本質そのものつまり「実相」であるという主張について、それがいかなる意味において語られているのかを考察してみたい。この考察は、具体的には次のような問いにもとづいている。

すなわち、論理的なことばや概念が到達しえなかった世界の実相をわれわれの前に開示しうる「声字」とは、いかなる意味のことばであるのか。そして、空海が何の根拠も脈絡もなしに「声字の外に実相なし、声字則ち実相なり」と主張しているのではないとしたら、この主張が可能であるためには、その背後に明確なある世界像[4]が隠されていなければならない筈である。それではその世界像とは何か。また、その世界像にかかわる『声字実相義』の智がどのような意味において捉えられているのか。これらの問いを考察することによって、空海の『声字実相義』が言語による単なる世界の説明を目的としているのではなく、世界の実相である真実のことば・真言の世界[5]と、その世界を「能悟」する智について、われわれに教示していることを明らかにしてみたい。このことはまた、空海の独自な密教思想を理解する一つの方途となる筈である。

二　「声・字・実相」の意味

いかなることばや概念であれ、それが世界の何かを表現していることは認めなければならない。もちろん、それが真理であるかどうか、真実

を正しく表わしているかどうかについては問われなければならない問題である。しかし空海は、後で考察するように、ことばや概念、すなわち声字や文字が世界の真理・実相そのものであり、それ以外の何ものでもないと考えている。しかも、声・字・実相は個々別々のものではなく、一体として理解すべきものであると述べている。

このことは、空海にとって声・字が世界の実相を表現し、記述する単なることばや文字、あるいは認識の概念ではなかったことを意味している。すなわち、声・字は、その意味において世界の本質・真理に完全に対応している概念なのである。それでは、声・字・実相はいかなる意味の概念であるのか。まず、これらのことばの規定から取り上げてみたい。

空海は、声・字・実相の語の意味を次のように規定している。

「初めに釈名とは内外の風気纔に発すれば必ず響くを名づけて声と曰うなり。響は必ず声に由る。声は則ち響の本なり。声発って虚からず、必ず物の名を表するを、号して字と曰う。名は必ず体を招く。之れを実相と名づく。声字実相の三種区に別れたるを義と名づく。又四大相触れて音響必ず応ずるを名づけて声と曰う。[6]」

すなわち、有情の口から出入する気息の発する響や地・水・火・風の四大（非情）が触れ合うときの音響を「声」と呼ぶのである。そして、「響は必ず声により、声は響の根本である」という意味からすると、声と響は厳密には体と用、つまり本体とその働きの関係にある。しかしここでは、声と響を区別しないでおく。音声という言い方も同義と理解してよいであろう。

次に、この声がものの名を表わすことを「字」と規定している。「字」とはものの名称つまり意味を表わす概念である。それがものの実体（真理）に対応するとき、それを「実相」と規定している。いわば、ことばの意味（概念）がものの本質・実体を表わしているとき、その概念（ことば・声字）は真理であるということになる。この声・字・実相の語の意味だけを取り上げれば、この概念規定は、顕密にかかわらず、ごく一般的なことばの規定と受け取ってよい。

しかし、これから見て行くように、声字・文字の概念規定において、空海の独自なことばの世界が提示されるのである。すなわち、「声の名を詮ずることは必ず文字に由る。文字の起りは之れ六塵なり。[7]」と述べて、声字と文字について規定している。声の名を詮ずること、すなわち声が意味を表わすこと、つまり「声字」は、具体的には必ず文字によるのである。この文字の主体は、色・声・香・味・触・法という六種の対

象（六塵）であり、この六塵の各々の差別相（顕・形・表）にもとづいてそれぞれの具体的な文字が成立するのである。[8] これは、決してことばや概念によって世界が構成されることを意味しているのではない。声字・文字は、五大、六塵にもとづくことばなのである。ところで、文字は具体的な対象の本質・差別相を表わすもの（能詮）の名称すなわち概念であると理解してよい。その意味で、声字と文字は本質的には同じカテゴリーに属していると言える。

空海は、「名は必ず体を招く。之れを実相と名づく。」と述べているが、これは名を表わす声字・文字がものの本体を開示しているとともに、ものの本体が声字として明かされるところに実相があると捉えているのである。[9] その意味で、声字・文字は必ずものの実体を招く、いわば実相に対応していると言えるのである。実はここに、『声字実相義』の核心があると言えよう。声字がすなわち実相であるという主張は、「六離合釈」でより明確に主張されているが、「ことば（能詮）こそ語義（所詮）を顕わすもの」[10]という意味で、一つはこのようなことばの理解にもとづいているのである。

声字は必ずものの実体・実相に対応しているという主張のキーワードが「声字」にあることは明らかである。そこで、この主張の意味内容を考える前に、声字の意味をできるだけ明確にしておきたい。「六離合釈」で述べていることであるが、声・字・実相は、それぞれに区別（差別）があることは当然である。その意味では、ごく一般的に理解すれば、声字が実相に対応しているとは必ずしも言えない。たとえば顕教においては、ことばは、悟りをめざす人たちの能力（機根）に応じてその内容を説き明すための方便（因分）であって、ことばによる世界の真理・実相（果分）の認識は不可能であると考えられている。実相は言語を超越し、法身は説法せずということである。いわば、実相は声字・ことばを超えたものとして理解されているのである。

しかし空海は、声字は必ず実相に対応していると言う。問題は、実相の可説、不可説の論議にあるのではなく、空海のことばと顕教のことばとがまったく次元の異なるところから理解され、把捉されているところにあると考えるべきであろう。空海にとって声字は、単なる説法のことばではなかった。それは決して説法の手段や道具としてのことば、すなわち認識のためのことばではなかったのである。『声字実相義』の冒頭の、

「夫れ如来の説法は必ず文字に藉る。文字の所在は六塵其の体なり。六塵の本は法仏の三密即ち是れなり。」[11]

という説明は、如来の説法が宇宙の真理・世界の実相である仏の身・語・意の三種の神秘的な働きを本質とする文字によることを明確にしている。そして、

「帰趣の本は名教に非ざれば立せず。名教の興は声字に非ざれば成ぜず。声字分明にして実相顕はる。謂わゆる声字実相とは即ち是れ法仏平等の三密衆生本有の曼荼なり。」[12]

ということばは、悟りの境界に達する道筋がすぐれた教えによらなければ示しえないこと、すぐれた教えが興るのは、声字によらなければ成立しないことを述べている。声字が明らかであってはじめて真理・実相があらわになるからである。そして、声字実相を「法仏平等の三密衆生本有の曼荼なり。」と捉えていることからすると、空海は、実相を開示する声字を法身仏の神秘的な活動（それはまた衆生の三密でもあるが）にほかならないと理解していることがわかる。したがって、法身仏の三密の文字による説法、あるいは声字にもとづく法身仏の三密の教えがいわゆる論理的なことばによる説法でもなければ、真理の論理的記述でもないことは明らかである。それ故に、空海の声字・文字は、根本的な意味において顕教とまったく異なることばとして捉えられていることを理解すべきである。

あるいは、『大日経』具縁品の「等正覚真言」等の頌文を引用して[13]、真言・声字を次のように説明している。

「頌の初に等正覚とは平等法仏の身密是れなり。此れ是の身密其の数無量なり。即身義の中に釈するが如し。此の身密は則ち実相なり。次に真言とは則ち是れ声なり。声は則ち語密なり。」[14]

これは、直接には『即身成仏義』の「重重帝網名即身」という頌文の釈にかかわることばであるが[15]、「真言とは則ち是れ声なり。声は則ち語密なり。」と述べているように、真言・声字を平等なる真理そのものである仏（身密）の語密、言語活動であると説明している。ここからも、声字が一般的な、したがって、仏の自境界（実相）を論理的に説明しようとする顕教的なことばではないことがわかる。すなわち、基本的に密教と顕教とでは、ことばの体系を異にしているのである。[16]

それでは、空海の声字をどのように理解すべきなのであろうか。「五大に皆響あり」の釈において、「五大の義は即身義の中に釈するが如し。」[17]と述べている。すなわち、この五大は、『即身成仏義』の五大、六大と同じ概念であるとしているのである。したがって、五大の響であるこの声字は、本質的には「六大無碍」の絶対的真理の世界を開示する真言であると理解してよい。

「六大無碍にして常に瑜伽なり」、「六大とは五大と及び識となり」という『即身成仏義』の規定から明らかなように、絶対的真理である六大の世界とは、識大と五大とが無碍自在である世界を意味している。[18] それは、識大と五大、主体と客体、智と理、行者と宇宙とが一体化し、身体の瞑想（瑜伽）において「一」なる世界そのものとなることである。この同一化した存在＝身体こそが即身成仏の意味である。それは観念的理念的な意味の身体ではない。世界の実相、絶対的真理そのものの現実存在として存在する身体（身密）である。この身体が開示する世界の実相の声と響の活動（語密）が声字である。

すなわち、「五大に皆響あり」、「六塵に悉く文字あり」とは、この世界の一切の声字が、「六大」において成立する実相の世界、主・客の対立の消滅した主体＝客体世界の言語活動にほかならないことを語っているのである。このように理解するとき、「声字実相」の世界が六大無碍の世界を前提にしていることがわかる。

ところで、『即身成仏義』に関連させて声字を法身仏の語密と捉えていることについて、もう少し考察しておきたい。何故なら、このことは、声字が単に法身仏の真言であるというだけの意味を語っているのではないからである。法身仏の語密とは、法身仏・世界の絶対的真理の側から声字を捉えていることを意味している。それは、「六大無碍にして常に瑜伽なり」という実相・身密の世界から声字・語密を理解すべきであって、決して声字すなわちことばや概念から実相の世界を理解すべきではないということを意味しているのである。ここに、顕教とまったく異なる空海の声字・ことばの理解がある。

顕教においては、論理的なことばや言説によって世界の本質や実相に迫ろうとするが故に、「如来の説法は不可説なり」と結論せざるをえなかった。しかし空海は、六大無碍の実相（身密）の世界から声字・真言（語密）を理解するが故に、声字による実相の把捉が可能であると考えているのである。[19]

具体的な例で言えば、阿字によって世界の実相そのもの・阿字本不生を把捉するのではない。それは、身体の瞑想（瑜伽）をとおしての「六大」の把捉、すなわち真理そのものの世界、一切の主客の対立が消滅し一体化した「一」なる主体＝客体世界（身密）の把捉から阿字を理解するということである。阿字は、かかる意味においてはじめて、この実相の世界をわれわれに開示している法身仏の秘密語・真言たりうるのである。この秘密語の意味（語密）が理解されない限り、いくら阿字を観ていても、それだけでは世界の実相そのもの・阿字本不生を真に悟ること

はできないと言えよう。

さて、声字の一応の意味を以上のように把握するとき、声字と実相の対応関係をどのように理解し、意味づけるべきであるのか。そして何よりもその対応において、根本的な意味で声字をいかなる概念と理解すべきであるのか、を探ってみたい。

三　「声字と実相」の六離合釈

空海は、声字と実相の対応関係の理解を五種の解釈で示しながら、それらに浅略と深秘の意味づけを与えている。この解釈すなわち「六離合釈」を注意深く考察することによって、空海の「声字と実相」の意味をより明確にしてみたい。まず第一の「依主釈」で声字と実相の関係を理解すると次のようになる。

「声に由って字有り。字則ち声が字なり。依主に名を得。若し実相は声字に由って顕はる。則ち声字が実相なりと謂わば、亦依主に名を得。」[20]

すなわち、声が主で字が伴、声字が主体で実相が伴という関係である。[21] 実相が声字の実相であるということは、実相が声字に依存しているということである。この「声字の実相」に注目するとき、この依主釈の理解は、声字が実相を表わすということ、あるいは声字の表わすもの以外に実相は存在しないということを意味している。いずれの理解にしても、声字によって実相が規定されるのである。

この釈は、ことばや概念によって真理が明らかにされることを意味している。この真理認識の立場は、ことば・声字を主体とする限り、客体である実相は主観的真理であるにすぎず、ことばによって切り取られた断面として明らかにされるのみである。世界は主観の構成する世界であるという意味で、哲学的には主観的観念論の立場である。したがって、この立場からは、客観的な絶対的真理を明らかにすることはできない。

声字に主体をおくこの依主釈によっては、実相そのものを把捉することは決してできないのである。その意味から、空海はこの釈を浅略であると規定しているのである。しかし、実相は声字の実相ではないにしても、声字の表わすもの以外に実相は存在しないという意味において、この解釈が「声字は実相である」という理解に至りうることでは、深い密教的解釈にも通じるものがある。空海がこの「依主釈」を浅深二釈に通じると述べているのはこのような理解によるのであろう。

第二の「有財釈」から声字と実相の関係を解釈すると次のようになる。

「若し声には必ず字を有す、声は則ち能有、字は則ち所有、能く字の財を有すと謂わば、則ち有財に名を得。声字には必ず実相を有し、実相には必ず声字を有す。互相に能所たりといわば、則ち名を得ること上の如し。[22]」

これは、声字と実相の関係を互いに能有所有の関係として捉える理解である。すなわち、声字の中に実相があるということ、あるいは声字をもたない実相は存在しないということを意味している。この理解は、声字以外に実相を表わすものは存在しないという意味ではない。声字と実相は、互いに他を有し合っている関係であるということを言っているのである。なるほど、「ことばは真実を語っている（所有している）」というのは、たしかに真実であろう。嘘の中にも真実があるからである。その意味では、空海の言うように、この有財釈にも深い意味が隠されていると言える。

しかし、この有財釈では、声字と実相は「互相に能所たり」の関係である。これは、声字と実相が本質的に異なることを前提にしている関係である。すなわち、能有―所有の関係は決して不二の関係ではない。その意味で、次に見る「声字則実相」の深い意味には解釈できないのである。たしかに、ことばの中には真実があるであろうし、真実はことばにおいて語られるであろう。その意味では深秘釈に通じる。しかし、ことばは真実そのものではない。たとえて言えば、嘘の中にも真実があることは、嘘が真実であることにはならないからである。ことばと真実は、どこまでも異なる二つのものとして能有―所有の関係にある。その意味で、この解釈は決して真実そのものを明らかにする声字と実相の理解とは言い難いのである。

第三の「持業釈」では、声字と実相を次のように解釈できるとしている。

「若し声の外に字無し、字則ち声なりと言わば、持業釈なり。若し声字の外に実相無し、声字則ち実相なりと言わば、亦上の名の如し。[23]」

この理解に立てば、声字は単に実相を表現する手段ではなく、実相そのものであることになる。声字の外に実相は存在しない。声字則ち実相であるというこの理解を、空海は深秘釈とする。それは、声字と実相を究極的には不二の関係で捉えている理解である。この理解に立つとき、声字と実相はもはや単なることば・言語の問題で理解されうるのではなく、ことばの論理性を超えた概念として理解されなければならないことになる。その意味では、声字と実相は単なる言語哲学や言語理論によって確定される「ことば」ではないと言えよう。この「声字則実相」を明確にするために、次の「隣近釈」と合せて考えてみたい。

第四の「隣近釈」による理解を次のように述べている。

「若し声と字と実相と極めて相迫近にして避遠なることを得ずと謂わば、並に隣近に名を得。[24]」

すなわち、隣近釈から理解すると、声と字並びに声字と実相は、個々の語義において区別(差別)があるにしても、しかしこれらのことばは、別々に理解され捉えられるべきものではないことになる。空海はこの隣近釈を深秘釈であると規定している。それ故に、「極めて相迫近にして避遠なることを得ず」という説明は、ただ、声と字と実相とが極めて近い、避遠でないというだけのことを述べているのではないと言える。空海は声と字、声字と実相をその本質において「一体のもの」として理解すべきであると考えていることを示しているのである。

「一体のもの」とは、二つのものがその基本的性質をもったままに一つに融合しているという意味ではない。それは、声字と実相が「一」なる全体概念すなわち「声字実相」として理解されるべきことを意味しているのである。それ故に、空海の深い理解に従えば、この世界は、声字と実相との一体化において、一切の差別を超越し包摂している法仏平等の「声字実相」の世界として把捉されるべきことになる。

空海は持業釈によって、声字の外に実相はないという意味で「声字則実相」の理解に立った。この隣近釈と合わせて理解するならば、すなわち空海は、「声字則実相」である「声字実相」の世界こそ法身仏の世界、絶対的真理・阿字本不生の世界であると理解しているのである。

ところで、このような世界の認識は、真理の認識を主観による客観の構成に基礎づける立場からは決して出てこない。「声字則実相」は、そのような主観と客観、主体と客体の区別を絶対的に超越しているからである。それ故に、「声字則実相」である「声字実相」の世界は、一切の区別・差別の消滅した「一」なる世界いわば不二の世界として考えられているのである。あるいはこの世界を主体と客体の対立を超越し包摂している主体＝客体世界と規定することもできる。先に少しく触れたように、これは『即身成仏義』の六大無碍の世界にほかならない。ここからも、「声字実相」の世界の背後に六大無碍の世界を前提することができるのである。

最後に、第五の「相違釈」では次のように解釈している。

「若し声字は仮にして理に及ばず、実相は幽寂にして名を絶せり、声字と実相と異り、声は空しく響いて詮ずること無し、字は上下長短にして文を為す、声と字と異なりと謂わば並に相違に名を立つ。[26]」

すなわち、この理解によると、声字は仮のもので世界の本質・真理を明らかにすることができないということになる。そもそも実相は、いか

なることばによっても言い表わすことができず、一切の概念規定を超えているものであるとする認識の立場である。最終的にこの立場は、われわれは世界の本質・宇宙の真理を絶対的な意味で認識することができないという不可知論に至る。その意味では、人間の論理的な知の限界を素直に認めているのである。

しかし空海は、このような声字と実相の把握を浅略であると理解している。何故であろうか。声字の意味については、すでにこれまでに考察して来たが、概念の根本的な意味において、空海の声字は、本質的に論理的認識の概念ではなかったのである。すなわち声字「則実相」とは、声字が世界の真理、存在そのものであることを意味しているからである。このことは、声字は実相を認識するための概念ではなく、明らかに、存在を開示する世界概念であることを意味していると言えよう。[27]

五大の声字とは、世界・存在そのものの真相を開示している存在の概念なのである。存在の概念であるが故に、声字は世界自体のことばであることが可能なのである。認識の概念であるならば、声字はどこまでも主観のことばでしかないであろう。それ故に、声字を単なる認識の概念と理解する顕教は、ついに世界の本質、存在そのものの真相を開示しうる通路を持たなかったと言える。空海にとって、この通路が世界概念としての声字であったのである。

「仏界の文字は真実なり、（略）此の秘密語を則ち真言と名づくる。[28]」と述べているように、声字は単なることばや文字ではなく、法身仏の真実のことばであり、秘密語である。それを通路にしてのみ、世界の真理・存在の秘密が開示されうる仏界の文字である。それ故に、この声字・真言を論理的なことばや概念と同じ次元から捉えるべきではないことがわかる。相違釈のように、声字を認識の概念としてのみ理解する立場からは、世界の実相は決して開示されはしないのである。

「相違釈」が浅略である理由は、この釈がかかる声字を認識の概念としてのみ理解してしまって、声字が世界概念・存在の概念であるが故に「則実相」であることについて理解することができないからである。空海は、この声字が「則実相」であることを理解するところに、「智」の意味を見出している。

四　声字実相と智の問題

「五大に皆響あり」とは、この世界が声字であることにほかならなかった。空海がこの五大について、「即身義の中に釈するが如し」と述べていたことはすでに見たが、『即身成仏義』に則して言えば、五大とは物質の構成要素ではなく、五つの本質的な意味に類型化して世界、宇宙の本質・実相を捉えている全体的世界概念であり、識大に現前する世界自体である。その意味で、五大は一切の存在者（識大）を包む世界あるいは存在者に現象する世界そのものと言えよう。したがって、五大の響である声字とは、存在者（識大）を包む・現象する世界自体（実相）の自己開示であり、五大としての自己自身を開示する世界自体のことば、実相の言語活動（語密）と言ってもよい。その意味で、「五大に皆響あり」とは、「声字則実相」を明かしているのである。[29]

このように世界を五大として捉え、声字則実相と把握すること、すなわち声字が五大である世界のことば、五仏五字および海会の諸尊の声響であると把握するところに「智」の意味がある。この智は、「六塵に悉く文字あり」の釈で、「能く迷い亦能く悟る」[30]と説かれている智者の「能悟」の智である。空海はこの「能悟」について、次のように説明している。

「智に於ては則ち能く因縁を観じて取らず捨てず、能く種々の法界曼荼羅を建立し、広大の仏の事業を作す。上諸仏を供じ、下衆生を利して自利利他玆れに因って円満す。故に「能悟」と曰う。[31]」

すなわち、智者にあっては、愚者のようにことばの差別相（六塵の文字）に執着せず、ことばの成立する原因条件をよく観察して、それに執着もそれを捨て去ることもせず、さまざまな真理の世界を打ち立て、仏の広大な働きをなし、上にむかっては諸仏を供養し、下にむかっては衆生を救って、自己の利と他者の利を充足させるから「能悟」と言うと述べている。

この「能悟」の智に注目したい。それは、智者のみが悟ることば（文字）の世界とは、「声字則実相」である「声字実相」の世界にほかならないからである。すなわち、ことばに執着することも、ことばを捨て去ることもせず、世界の真理を打ち立て、世界の実相を現実化し、諸仏を供養し、衆生を利し、自利利他を実践する智とは、まさに世界の本質、宇宙の真理が声字実相であることを悟っている智にほかならないのである。

それでは、この智はこの世界をどのように悟っているのであろうか。まず一つは、世界が「声字則実相」であると把捉していることである。

それは、声字の外に実相が存しないこと、五大にみな響があり、六塵にことごとく文字があることを知っていることである。この知ることに「能悟」の智の主体性がある。すなわち、智は自己を包む世界いわば識大に現象する世界（五大）を把捉する主体として、五大に現前しているのである。智はこの主体性において、声字則実相であることを悟っているのである。

二つは、「言名成立の相[32]」の説明で次のように述べていることに関連している。

「阿の声は何れの名をか呼ぶ。法身の名字を表す。即ち是れ声字なり。法身は何の義か有る、謂わゆる法身とは諸法本不生の義、即ち是れ実相なり。[33]」

この釈に「能悟」の智を当てはめて考えると、智の意味は、法身すなわち世界の真理・阿字本不生を「声字実相」と把捉することである。阿字本不生とは、六大の世界にほかならない。その意味でこの智は、声字においてこの世界を主客の一切の差別を超越し包摂した「一」なる世界、六大無碍の世界と悟っているのである。かかる智にしてはじめて、「声字実相」の世界を能悟することが可能なのである。この智は、声字実相が「法仏平等の三密衆生本有の曼荼」であること、すなわち宇宙の真理である仏の平等なる三つの神秘活動であり、衆生が本来的にそなえもっている本質そのもの（曼荼羅）であり、三密でもあることを悟るのである。[34]

ところで、この智は「六大無碍」の智ではない。「能悟」という意味で、この智は五大を世界自体・存在そのものとして把捉する主体性を保持しているからである。「六大」の智は、識大と五大が一体化し、識大の主体性が完全に消滅した無碍自在の法仏平等の智である。そこに智の主体性を見い出すことはできない。したがって、「能悟」の智が悟りの主体性を保持しているということは、悟りの通路としての五大が智の前に措定されていなければならないことを意味している。いわば「五大にみな響があり」と世界を把捉する主体の存在が必要なのである。

先の「上諸仏を供じ、下衆生を利して自利利他茲れに因って円満す。故に「能悟」と曰う。」ということばは、空海がこの智にまさに菩薩の智をあてていると言ってよい。[35]このことは、この智が悟りの主体性を保持している智（因）にほかならないことを明確に述べていると理解できるのである。

智の主体性を保持しているという点で、『声字実相義』の智は、『大日経』の「如実知自心」の智と同じ立場に立っていると言える。『大日経』の智、一切智々もまた自心を知り、菩提を求める智の主体性（菩提心）を保持しているからである。さらに、所依の経論について言えば、『声

字実相義』は「声字実相」の体義の釈に、『大日経』具縁品から「等正覚真言」等の頌文を正所依[36]として「声字則実相」の意味を明らかにしている。このことは、その例証ではないだろうか。ともあれ、『声字実相義』は、『即身成仏義』の世界を背後におきながら、しかし『即身成仏義』とは異なる智の視座から「声字実相」である法身仏の世界・阿字本不生の把捉への通路、すなわち語密を教示しているのである。

注

『声字実相義』（『声字義』と略す）の引用は、『弘法大師全集』第一輯（密教文化研究所編）によった。なお読み方は、小田慈舟著『十巻章講説』上巻（高野山出版社、昭和五十九年）を援用した。

（1）『声字義』五二四頁。

（2）小田慈舟著『十巻章講説』上巻　一九六頁参照。

（3）『声字義』五二四～五頁。

（4）世界観としなかったのは、世界観では世界を客観的全体的にどのように把握し、観るべきであるのかという認識の意味が強調されるからである。しかしここでは、空海が単に世界認識の問題だけではなく、存在（法身仏）の地平から、現存在としての身体をとおして世界の全体像を具体的立体的に描こうとしていることを強調したいので世界像とした。

（5）空海の「ことば」は、言語哲学あるいは言語理論から理解することができる。しかし、その「ことば」の世界を哲学的論理的理論構造による言語論の問題としてのみ解釈することには限界があろう。空海の「ことば」とその世界は、いわゆる学問や科学のもつ論理性合理性の枠組を越えていると思う。

これに関連して言えば、井筒俊彦氏は異次元としてのコトバ（存在喚起エネルギーとしてのコトバ）を理論ではなく、実在感覚において考えるべきではないかという意味のことを述べておられるが、まったく同感である。井筒俊彦著「言語哲学としての真言」五十六～頁参照。（『密教学研究』第十七号、日本密教学会、昭和六十年三月）

（6）『声字義』五二二頁。

（7）『声字義』五二二頁。

（8）『声字義』五二八頁。

（9）宮坂宥勝著『密教世界の真理』一二七頁。（人文書院、一九八〇年版）

（10）北條賢三著「空海の言語理論」四一頁。（『理想』第五百九十四号、一九八二年十一月）

（11）『声字義』五二一頁。

（12）『声字義』五二一頁。

（13）「等正覚真言　言名成立相　如因陀羅宗　諸義利成就　有増加法句本名行相應」『声字義』五二三頁。

（14）『声字義』五二三～四頁。

（15）小田著『前掲書』一八五～六頁。

（16）宮坂著『前掲書』一〇九頁。北條著「前掲論文」参照。

（17）『声字義』五二四頁。

（18）空海の六大とその思想については、拙論「空海の六大思想」（『密教文化』第百五十九号、高野山大学密教研究会、一九八七年九月）を参照されたい。

（19）この意味で、空海の言語論について禅定が問題になる、とする吉田宏晳氏の指摘は正しいと思う。吉田宏晳著「日本の仏教思想㈠―空海の場合―」四十五～六頁参照。（『仏教学』第二十号、仏教思想学会、

一九八六年十月）

(20)　『声字義』五二二頁。

(21)　小田著『前掲書』一七一頁。

(22)　『声字義』五二二頁。

(23)　『声字義』五二二頁。

(24)　『声字義』五二二頁。

(25)　「声と字と実相」の関係については、小田慈舟氏の解釈に従った。すなわち、小田氏は「並」の字に注目して「声と字と実相」は「声」と「字」との関係と、「声字」と「実相」との関係と二重に意得るべきであると解釈しておられる。小田著『前掲書』一七三頁。

(26)　『声字義』五二二頁。

(27)　空海の「ことば」が存在を開示する概念であるということについて言えば、「悟りの世界自体の自己言語化の『プロセスとしてのコトバ」が、「そのまま存在世界現出のプロセスである」と考えることで、「存在はコトバである」という命題が無条件に成立するという井筒氏の理解は納得できる。井筒著「前掲論文」六頁。

(28)　『声字義』五二五頁。

(29)　小田著『前掲書』一九二～四頁参照。

(30)　『声字義』五二七頁。

(31)　『声字義』五三一頁。

(32)　注(13)参照。

(33)　『声字義』五二四頁。

(34)　宮坂、梅原著『仏教の思想9生命の海〈空海〉』一三七頁参照。(角川書店、昭和五十九年版)

(35)　小田著『前掲書』二五八頁参照。

(36)　小田著『前掲書』一三五頁。

第二章　声字実相の存在論的意味

一　ことばと現象の世界

空海のことばの世界は、第一章で考察したように、「声字則実相」として把捉されている。このことば、すなわち声字・文字は、世界についての単なる表現や記述のための言語でも、主観の世界構成のための認識の概念でもなかった。ことば（真言）は、空海にとって世界の真理、存在の実相を開示する世界概念であったのである。五大の声響すなわち真言として提示される五大のことばは、世界自体を開示する存在のことばにほかならなかったのである。それが、「声字則実相」の意味する内容であった。

しかし、ことばが世界の真理、存在の実相を開示する概念であるとしても、このことば（真言）についての規定そのものは、「声字則実相」という命題をその形式いわばことばの概念的意味規定から語っているにすぎない。したがって、この命題は、存在の実相すなわちことば（真

言）の存在論的側面においてどのような意味内容（体義）を明らかにしているのか、が問われなければならないであろう。それと言うのも、ことばの形式と内容を明確にすることによって、空海の声字実相の世界の意味内容がより鮮明に提示されうると考えるからである。空海は、この問いについて、声字実相の体義を明かす頌[1]（「五大皆有響」等）の第三句「六塵悉文字」と、この頌文についての解釈で答えている。そこで、この頌文に与えている空海の解釈をとおして、声字実相の世界の意味内容を明らかにしてみたい。

空海は声字則実相である現象の世界、五大の表象（真言）の世界の意味内容とその世界像を「六塵悉文字[2]」の頌文とその釈で構想している。この「六塵悉く文字なり」は、「内外の文字を尽す[3]」と説明されているように、内外すなわち有情（生きとし生けるもの）と非情（物質的世界）の文字について明らかにする頌文である。なお、この頌文の解釈が巻末までに及んでいる。その意味では、この釈の理解に声字実相の具体的な意味内容があると予想してよいであろう。それでは、まずその釈から取り上げてみたい。

「次に内外の文字の相を釈せん。頌の文に六塵悉文字とは六塵と謂うは一には色塵二には声塵三には香塵四には味塵五には触塵六には法塵なり。此の六塵に各文字の相有り[4]。」

すなわち、色・声・香・味・触・法の六塵（六種の対象）にそれぞれ文字の相違があるというのである。そして空海は、ここで、「初の色塵の字義差別云何。」として、有情非情・内外の文字の相を明らかにするために、六塵のはじめの色塵（見えるもの・現象）の文字の相についてのみ考察している。それが次の頌である[5]。

「顕形表等の色あり　内外の依正に具す
法然と随縁と有り　能く迷い亦能く悟る[6]」

「声字則実相」とは、声字の外に実相が存在しないこと、声字が実相であることを意味している。先にも述べたように、この命題は、声字（ことば）の本質的な意味について、その形式を規定しているのである。そのかぎり、「声字則実相」におけることば（概念）の規定は、声字と実相が不二の関係にあることを明らかにしているのであって、声字実相の世界それ自体の具体的な意味内容の解明、いわば存在解明ではないと言えよう。それに対して、この四句の頌は、声字実相の具体的な存在論的意味内容を解き明かそうとしているのである。

空海にとって、ことば（真言）は、現象界を表現し記述する単なる言語ではなかった。五大、六塵のことばは世界の実相を開示する法身仏の秘密語であったのである。それ故に、「六塵悉く文字なり」と世界を規定するとき、当然にこの六塵の文字は、単なる現象世界の相を表象しているのではない。文字は、いわば世界における存在者の存在・実相の意味を明かしているのである。その意味で、右の四句の頌文は、空海のことばについての理解だけでなく、現象世界あるいは宇宙・大自然について、ことばの開示する世界、すなわち真言世界の構想とその世界についての理解でもあったのである。そこでまず、この四句の頌文について順次に考察を加えながら、空海の「声字実相」の世界を全体像として組み立ててみたい。

初めの句「顕形表等の色あり」は、「色の差別を挙げている」と空海自身が解説しているように[7]、われわれの前に現象するすべての存在者（見えるもの・色塵）の存在相を規定している頌文である。この頌文の本質的な意味を取り出すと、この頌文は、現象世界が個々の在り方と独自の性質をもって現われている世界、すなわち差別の世界であることを述べていると理解してよい。その意味で、六塵の文字・ことばは、現象界のすべての存在者を個別化（差別）する存在の原理であると言えよう。すなわち、

「初の句に顕形表等色とは此れに三つの別有り。一には顕色、二には形色、三には表色なり[8]。」

いわば、この現象世界は「いろ」と「かたち」と「うごき」をもった個別的な存在者の世界であると言うのである。文字はこの顕形表の三種の在り方を明確に区別することによって、世界を個々の存在相（三色）において明らかにするのである。すなわち、「いろ」と「かたち」と「うごき」で規定され区別される世界、それが色塵の文字の世界である。この存在の差別相こそが文字にほかならない。

「是の如くの差別は即ち是れ文字なり。各々の相則ち是れ文なるが故に、各々の文に則ち各々の名字有り、故に文字と名づく。此れ是の三種は色の文字なり。或は廿種の差別を分つ。前に謂う所の十界の依正の色差別なるが故に[9]。」

空海は、顕形表の三色の区別や相違がそのまま文字であると把捉しているのである。すなわち、それぞれの差別相が文つまり存在の意味であるがために、それぞれの文にそれぞれの名字（なまえ）がある。それ故に、これを文字と名づけると言う。空海は、顕形表の三種を、色すなわち見えるもの・現象の文字と規定しているのである。

さらに言えば、見えるものを二十種に区別することもできると言う。それは、十界について依正すなわちよりどころとなる国土とそこに住む

生きものの二種の色・在り方に区別することができるからである。それ故に、この世界、宇宙に合わせて二十の差別相（存在相）を考えることができるのである。

この釈によれば、文字・ことばは、現象する個々の存在をそれとして区別するだけの概念ではなく、仏、菩薩等、地獄の十界の存在者の身心と国土をそれぞれの存在相（三色）において個別化する概念である。このことは、ことばが世界それ自体の存在を個々の差別相において開示する概念であることを意味している。そして、

「是の如くの種々の色の差別は即ち是れ文字也。(略)然れども内外の十界等には出でず。是の如くの色等の差別是れを色等の文字と名づく。[10]」

すなわち、文字はすべての存在の差別相そのものである。そして、十界の有情非情・内外のすべての存在相を区別（差別）するものとして、文字・ことばは十界を越え出ることはない。十界に現象する一切の存在相はこの文字・ことばによって尽くされ、把捉されているのである。いわば、文字の外に世界は存在しないのである。

かくして、空海にとって、文字・ことばは、顕形表の三色において、この世界の一切の現象、すなわち有情非情内外の存在者の存在相を規定し表象する個別化の存在原理にほかならなかったのである。六塵の世界は六塵の文字によって規定され表象されてはじめて、その存在の相が世界の地平に浮かび出てくるのである。簡明に言えば、「存在はことばである」ということである。

それでは、個々の存在（差別相）として姿を表わすこの現象世界・六塵の世界は、どのような全体像において捉えられているのであろうか。

二　「内外依正」の世界観

内外の世界における顕形表の三種の文字、すなわち六塵のことばが、全体としてどのような世界の存在相を表わしているのかを明らかにするのが、「内外依正具」という頌文の意味である。この把握は、空海の世界観についての一つの理解となると言ってもよいであろう。

「次に内外依正具とは此れに亦三つ有り、一には内色に顕形等の三つを具することを明かし、二には外色に亦三色を具することを明かし、三には内色定んで内色に非ず外色定んで外色に非ずして互に依正と為ることを明かす。内色と言うは有情、外色とは器界なり。経に云わく、仏身は不思議なり、国土悉く中に在り、又一毛に多刹海を示現す、一一の毛に現ずること悉く亦然かなり、是の如く法界に普周す。[11]」

すなわち、内外依正具の意味は、第一に、内色・有情（生きとし生けるもの）に顕形表の三色がそなわっていること、第二に、外色・非情（物質的世界）にも同様に三色がそなわっていることを明らかにしている。いわばこの内外の世界は、それぞれが顕形表の三色において現象しているのである。そして第三の意味として、有情非情・内外が互いに依正二報となって、それぞれの依正の中に三色をそなえているということである。

ところで、「内色定んで内色に非ず。外色定んで外色に非ず、互いに依正と為る」ということばに、空海の世界観がもっともよく表われていると思う。すなわち、この意味は、有情非情・内外の在り方が固定的確定的に定まっているのではなく、内外ともに依正二報をそなえているということである。したがって、内色は正報（衆生の身心）、外色は依報（そのよりどころとなる環境世界・国土）と固定的に確定されていると理解すべきではない。この関係は、内色・有情が依報となり、外色・非情が正報となる世界でもあることを意味しているのである。[12] 空海は、このような内外依正の相互的関係性（換置性）の中で、五大・六塵のことばの世界をダイナミックに把捉していると言えよう。

そして、いわば自己の在り方を固定せず、自己が他となり他が自己となるというこの関係は、現象世界の在り方についてだけ見られるのではなく、本質的な意味で、世界の実相である仏身の在り方においても同様なのである。すなわち、空海は、『華厳経』（八十巻）のことばを引用して、仏身の不思議さとは、所住・国土の中に能性・仏身があるという一般的な理解に終わるのではなく、国土のことごとくが仏身の中にあるということ、仏身の一毛に多くの国土を示現しているということ、すなわち正報・仏身が依報となり、依報・国土が正報となる意味を明かしているのである。[13] そして、このような内外依正の在り方は、法界・全宇宙にあまねく行きわたっていると理解している。

このことから、内外の依正二報は、内外が互いに依正となること、すなわち互為依正性とでも言うべき在り方の中で、世界の存在相を顕形表の三色・文字として表象していることがわかる。そして、この互為依正性[14]について言えば、内外が互いに依正となるとは、単に内外の依正が入れ代わっているという意味ではない。内色の在り方が外色である国土・環境世界の在り方を規定しているとともに、同時に、環境世界である外色も内色の在り方を規定しているということを意味している。すなわち、この規定性とは、正報・身心の外に依報・国土は存在せず、依報・国土の外に正報・身心が存在しないことを意味しているのである。別の言い方をすれば、それは身心の中に国土があると同時に、国土の中に身心があるという世界の相互規定性である。

そこで、この互為依正とでも言うべき世界について、一言だけ考察を付け加えてみたい。依正すなわち身土は、互いに別々の存在相として存在しているのではない。身心と国土は、切り離すことのできない相互的な関係において存在しているのである。したがって、この世界は、内外依正の互為依正性を本質とする重々無尽の世界と言うしかないであろう。それ故に、この世界においては、依報である国土はもはや単なる環境世界を意味しているのではない。それはまた同時に、正報すなわち生きとし生けるものの身心でもあることを意味しているのである。

その意味で、一つの議論として、この内外の依報と正報の重々無尽の世界を宇宙的生命・絶対的真理の世界と考えることができるのではないだろうか。何故なら、有情非情内外の依報と正報、すなわち国土と身心・環境世界と生きとし生けるものという関係を固定的な対立関係としてではなく、相互規定的な互為依正の重々無尽の関係として理解するならば、この世界は、内外依正の互為依正性にもとづいて現象している宇宙的生命の現われの世界にほかならないと考えることができるからである。すなわち、空海の内外依正の世界は、存在論的な意味において、絶対的真理の現象である宇宙的生命の重々無尽の世界であると理解することができるのである。

それはさて置き、ことばはこの内外依正の世界のいかなる意味を明らかにしているのであろうか。

「此の内外の依正の中に必ず顕形表等を具す。故に内外依正具と曰う。[15]」

すなわち、内外二色の依正の世界、互為依正性の世界の中に、必ず顕形表の三色すなわち文字が存するということは、内外依正の世界がことば・文字によって現象している世界であることを意味しているのである。これは、宇宙・大自然のさまざまな現象が五大の響・声字の開示するものであることを意味している。いわば、内外依正の顕形表の三色は、重々無尽の世界の存在相（存在の差別相）を明かすことばにほかならなかったのである。このような意味において、空海は、ことば（真言）がかかる内外依正である重々無尽の世界の存在論的意味を開示していると考えているのである。

それ故に、空海は、この世界を重々無尽の現象世界（互為依正性の存在世界）として把捉しえたとき、はじめて、ことば（真言）において世界の実相が開示されていることを確信することができたのではないだろうか。ことばの明かすかかる世界の認識こそ、「内外の依正に具す」という頌文の提示する声字実相の世界の意味内容、すなわち空海の世界観にほかならなかったのである。

三　「法然と随縁」の存在相

顕形表等の色において現象している世界は、個別化の原理によって規定され表象されていた。空海は、この現象世界を「内外依正」の互為依正性を本質とする重々無尽の世界として把捉していた。それでは、この世界を世界として現象させている原理、いわば存在者の存在の原理は、どのような意味において捉えられるべきであろうか。空海はそれを「法然随縁」の概念で明らかにしようとしている。

「法然随縁有とは如上の顕形等の色或は法然の所成なり。謂わく法仏の依正是なり。[16]」

この釈は、先の内外の依正の中に必ず顕形表等の色を具すということばを受けて、その三色がどのような存在の原理にもとづいてあらわれているのかを説明しているのである。この釈文の「或は法然の所成なり」の「或は」が、随縁の意味を前提にしているものと理解するならば[17]、この釈文の意味は、顕形等の色があるがままに成立しているとともに、条件（縁）によって成立しているということ、すなわち三色が法然の所成であるとともに、随縁の所成であることを述べていると理解できるのである。空海は、法仏の真理の世界の存在相が法然と随縁の所成であると捉えているのである。そして、この法然と随縁の所成について言えば、空海は、法仏の依正すなわち真理そのものを体現している仏の身心と国土がそれであると捉えている。さらに『大日経』を引用して、その意味をより明確にするために次のように説明している。

「此の文は何の義をか現顕する。謂わく二義有り、一には法仏法爾の身土を明かす。謂わく法界性身法界幖幟の故に。二には随縁顕現を明かす。謂わく、菩薩随福所感と及び如来の信解願力所生との故に。（略）法身の依正は則ち法爾所成なり、故に法然有と曰う。[18]」

この釈文は、自性身の身土について、法爾随縁の意味を明かしていると理解してよい。[19]すなわち、法爾随縁の意味が、法仏の依正・身土にほかならないことを説いているのである。法仏の身土は、その存在自体が真理そのものであるが故に、あるがままにあらわれており、菩薩の過去の福徳あるいは如来の信解願力によって生じたが故に、条件（縁）によってあらわれているのである。

現象世界が絶対的真理である法身仏の顕現にほかならないとするなら、この世界の存在相（互為依正の三色）は、存在の根本的な意味において、法身仏の法然と随縁の所成として捉えることができるのである。その意味で、有情非情内外の依正二報の現象、表象の世界（ことばの世界）は、世界の真理である法身仏があるがままにあらわれている在り方と条件によってあらわれている在り方とにおいて成立している世界であると言えよう。それでは、この法身仏の顕現の世界が、具体的にはどのような存在の世界を開示しているのであろうか。

「上に説く所の依正土は並に四種身に通ず。若し竪の義に約せば大小麁細有り、若し横の義に拠らば平等平等にして一なり。是の如くの身及び土並に法爾随縁の二義あり、故に法然随縁有と曰う。[20]」

すなわち、法仏の正しい報いの身心とそのよりどころとなる国土は、いずれも四種の仏身すなわち法身仏・報仏・応化仏・等流仏（自性・受用・変化・等流の四種身）に通じているのである。いわば、四種の仏身は、それぞれ依正二報の存在相（差別相）において各々の仏身をあらわしているのである。そして、この四身を竪に区別する意味で理解するなら、これら四身には、大小とか粗大・微細などの差別すなわち区別があるであろう。しかし、もし横に区別のないという意味で理解するならば、四身はまったく平等にして同一であると言うのである。

いわば、法然である法身仏が随縁の仏身として顕現するとき、それは絶対的真理の個別化の現象にほかならない。その意味では、そこに大小・粗細の差別を見い出すことができる。しかし、四身は、その本質にしたがって絶対的真理を開示しているにすぎないと見るなら、この四身の在り方は法然にして平等であると言えるのである。

このことから、法仏の依正、身心および国土には、いずれも、あるがままにあらわれ平等であるという意味と、条件によってあらわれて区別があるという意味の二つの意味（両義性）があることがわかる。空海は、このような理解から宇宙の真理とも言うべき法仏の顕現に法然と随縁とがあると捉えているのである。すなわち、この世界の本質、宇宙の真理である法身仏の依正の世界は、法然・あるがままにあると、随縁・条件によってあるという存在の両義性において成立しているのである。この在り方が、世界の根源的存在相であり、したがって、世界の実相・宇宙の真理の存在相なのである。

そして、「是の如くの諸色は皆悉く三種の色を具して互に依正と為る。[21]」と述べているように、この現象世界のあらゆる存在は、顕形表の三色をそなえ「互いに依正となる」こと、すなわち互いに身心とも国土ともなるのである。これは、どういうことを意味しているのであろうか。互いに依正となるとは、仏身（四種身）すなわち真理の顕現がここでも互為依正性を本質としているということにほかならない。したがって、仏身が三色をそなえ、その身心と国土とが互いに依報ともなり正報ともなる仏身の顕現に、法然と随縁の意味、あるがままにあらわれる在り方と条件によってあらわれる在り方とを見ているのである。

存在世界、現象の世界あるいは自然と言ってもよいが、この世界の実相・絶対的真理は、現象世界、存在世界に五大のことばとして周遍して

いる。この五大のことばによって世界の実相が開示されるとき、ことばは同時に法仏の依正に法然と随縁との両義性があることを明かしているのである。具体的に言えば、ことば・真言が法身仏を明かすとき、この真言はそれとともに四種の仏身の存在をも明かしているのである。このような意味において、空海は、法身仏（自性身）がその顕現において存在の両義性をもっていることを明らかにするのである。かかる把捉において、世界の実相は、そのあらわれにおける法然と随縁という存在の両義性を原理として、自己の存在を開示していると理解することができよう。

そして空海は、衆生の在り方についても、同様に法然随縁を見ている。

「此れは且らく仏辺に約して釈す。若し衆生辺に約して釈せんことも亦本覚法身有り、仏と平等なり。此の身此の土法然の有なり而已。三界六道の身及土は業縁に随って有なり。是れを衆生の随縁と名づく。[22]」

すなわち、生きとし生けるものも、本来的に真実の体（本覚法身）を有しており、仏と平等であるという点から言えば、この身心と国土はあるがままの存在以外のなにものでもない。そして、三界六道における衆生の身心とよりどころとしての国土は、かれらの行為を条件としてその在り方が決定されているのである。これを衆生の随縁と言うと説明している。すなわち、生きとし生ける衆生の身心と国土もまた、法然と随縁の両義性において存在しているのである。言うならば、われわれの現存在は、あるがままにあるとともに、自らの条件によってあるのである。このことは、仏と衆生と物質的世界のそれぞれの依正に法然と随縁の意味があることを示している。

かくして、

「是の如くの法爾随縁種々の色等の能造所造云何。能生は則五大五色、所生は則ち三種世間なり。此れ是の三種世間に無辺の差別有り。是れを法然随縁の文字と名づく。[23]」

すなわち、このようなあるがままの真理の世界の色と、縁によってあらわれている現象世界の色の能造所造について言えば、あらゆるものを生み出している主体は、地・水・火・風・空の五大であり、五色である。生み出されるものは、仏と衆生と器世間（物質的世界）との三種である。この三種世間に無辺の差別があり、その差別相を法然と随縁の文字と名づけると言うのである。このことからも、六塵の文字で表わされる一切の存在の世界、全宇宙が法然と随縁の両義性をもっていることがわかる。

空海にとって、この世界は、内外依正の互為依正性によって現象している存在の世界、すなわち無辺の差別の世界であった。それ故に、六塵の具体的表象（声字・文字）の世界は、かかる互為依正の世界の存在相・差別相を顕現する法然と随縁という存在の両義性の表象にほかならなかったのである。そして、この両義性の認識すなわち存在の差別相を認識する智が、次に考察する能悟の智の意味である。

四　ことばと「能悟」の意味

「声字則実相」の存在論的な意味内容を解明するために、これまで、「六塵悉く文字なり」という頌文の字義を解説している四句の頌文のうち、三句の頌とその釈について考察を加えてきた。最後に、これまでの考察を踏まえて、六塵の文字すなわち空海のことばの意味を簡単に要約しながら、第四句の頌文「能迷亦能悟」について、その意味を考察しておきたい。

「顕形表等の色あり」について、空海は、この頌文の釈で「色の差別」を挙げて、現象世界の存在を個別的な存在の差別相（三色）において捉えていた。この差別相が文字である。それは、六塵の文字・ことばが個別化（差別）の原理であると同時に、世界を個々の存在相において開示している概念であることを示している。その意味で、「声字則実相」を「存在はことばである」という命題として理解することができる。いわば、存在者の存在がことばの地平において開示されているのである。

この存在の意味内容を追求しているのが、「内外依正具」という頌文である。空海は、この頌文の釈で、顕形表等の色を表象する文字が内外の依正にそなわっていること、つまり文字・ことばが、有情非情の依正・身土における存在相を開示していることを明らかにしている。ことばの開示する存在相（差別相）は、内外が互いに依正二報となっている存在の本質を反映していたのである。すなわち、世界は、内外の互為依正性において自己の存在をことばとして開示し、現象しているのである。そして空海は、この世界（十界）が内外の互為依正性を本質とする重々無尽の世界であることを明かしている。それ故に、ことば（文字）は、空海にとって、単に世界の個別的存在相（差別相）を提示するだけの概念ではなく、この世界の実相が互為依正性の重々無尽の世界であることを開示する概念にほかならなかったのである。かかる重々無尽の世界の実相・内外二色の互為依正性を明かすことばが、法仏の秘密語すなわち真言にほかならない。

重々無尽の世界において、世界（十界）の存在者は、法然と随縁すなわちあるがままにあらわれる在り方と条件によってあらわれる在り方に

おいて、自己の存在を法然随縁の文字・ことばとして顕現していた。この存在の顕現について言えば、空海は、「法然と随縁と有り」の頌文の釈でその在り方を解明している。すなわち、法仏の依正二報・身心と国土が法然と随縁の二つの在り方を原理としてあらわれていることを明らかにしているのである。この法然随縁の理解から、空海がこの世界の真理、全宇宙の存在者の存在（実相）を、いわば内外二色の互為依正性と法然と随縁の両義性とでも規定すべき概念において把捉していることを考察しえたのである。

さらに空海は、仏と衆生と器世間の三種世間が、依正二報において法爾随縁の在り方として自己の存在相を顕現していることを語っている。この顕現は、無辺の差別を表わす存在相の開示以外のなにものでもなかった。空海は、この存在の差別相を法然と随縁の文字と名づけていた。このことは、ことば・真言が内外依正として存在する存在者の法然（法爾）と随縁の存在開示であることを語っているのである。すなわち、ことば（声字・文字）とは、世界の絶対的真理（法身仏）の存在開示にほかならなかったのである。

このような第三句までの理解を踏まえたとき、「能く迷い亦能く悟る」という頌文の意味を、これまでの三句の頌文との関連において考察しておく必要がある。空海は、この頌文については二個所で触れている。

はじめの個所は、顕形表等の色の差別相、すなわち文字・ことばの本質的意味である存在の差別相の認識に関係づけて頌文の意味を解釈している。この意味からの頌文の理解については、「能悟」の智の問題として、すでに第一章で考察しているところである。そこでは、ことば（文字）の差別相に執着せず、ことばの成立する原因条件の道理を知るが故に自利利他の大仏事を実践する「能悟」の智の内容を、「声字則実相」の意味から把捉すべきであることを考察しておいた。もう一個所というのは、すぐあとで触れるように、この頌文は「法然随縁」との関連で語られている。そこで、これら二個所の頌文の「能悟」の意味について、簡単ではあるが、この章の論旨にそった形で考察しておきたい。

これまでの考察から、「能く悟る」とは、五大・六塵のことばの世界が、それぞれの差別相において存在することを知ることであるとともに、この現象世界が内外の互為依正性を本質とする重々無尽の世界の存在相において差別され区別されていることを知ることである。そして、ことばが開示するこの世界が、その存在において法然と随縁の両義性を顕現の原理としてもっていることを知ることである。すなわち、

「是の如くの内外の諸色愚に於ては毒となり、智に於ては薬と為る。故に能迷亦能悟と曰う。[24]」

いわば、有情非情内外の依正二報にそなわっている顕形表の存在の差別相（諸色）について、愚者はその差別相の法然随縁の意味（両義性）

を知らない。しかし智者は、この存在の差別相に法然随縁の両義性の存することを知っているのである。迷悟の別は、まさにこの法然随縁の両義性を知っているか否かにあると言える。[25]

すなわち、「能悟」の智は、法然随縁の差別・区別を知っているということである。しかしこの意味は、単に内外の依正にある顕形表の三色の在り方（差別である現象）を知っているということを言うのではない。この差別相つまり存在者の存在が、法然と随縁という存在の両義性を原理として顕現している差別相（文字）以外のなにものでもないことを能悟するところにあるのである。

別の言い方をすれば、この智の意味は、顕形表等の諸色つまり五大・六塵の現象を単に知覚されるそれとして認識していることを言うのではない。その意味は、存在するもの（五大・六塵）の現象の背後に存するいわば超越論的な存在原理（法然随縁）を把捉し、その原理にもとづく存在の顕現が、ことばにほかならないことを知っていることを言うのである。それ故に、存在の両義性、すなわちことば（真言）として明かされている法然と随縁の存在論的意味を知ることが、悟りの薬となる智者の「智」の意味であったのである。

注（1）「五大皆有響　十界具言語　六塵悉文字　法身是実相」『声字義』五二四頁。

（2）この箇所の「六塵悉文字」の頌文を「六塵に悉く文字あり」と読むか、それとも「六塵悉く文字なり」と読むかによって、六塵の意味の理解が異なる。前者は、色、声、香、味、触、法の六塵のすべてに文字があることを意味している。それに対して後者は、六塵、この場合は色塵である現象世界が、六塵（色塵）によって尽くされており、文字・ことばは、六塵（色塵）そのものであるという意味になる。ここでは、文字でない六塵（色塵）は存在しないという意味を明確にするために、「六塵悉く文字なり」と読む方が意味内容が正確になると思う。小田慈舟著『十巻章講説』上巻二二一頁参照。

（3）『声字義』五二四頁。

（4）『声字義』五二六頁。

（5）空海は、六塵のうちの色塵についてのみ解釈していて、他の五塵についてはまったく触れていない。そのために、『声字義』は未完成の作品であるのかどうかで、従来から議論されている。論述の構成上、提出した問題なり事柄について完全に答えていないという意味ではたしかに未完成である。しかし、空海のことばの世界、「声字則実相」の世界の構想とその存在論的意味内容を明らかにするとき、色塵の解釈は、六塵のうちの単なる一つである色塵を取り上げているにすぎないと理解することはできない。色塵の解釈は、本質的には「具体としての六塵」の解釈であると言うべきである。その意味で、残りの五塵を解釈したところで、空海のことばの世界に何か新しい思想が付け加わるとは予想できない。そのかぎりでは、思想的には十分に完成していると言えよう。

（6）『声字義』五二七頁。

（7）『声字義』五二七頁。

（8）『声字義』五二七頁。

（9）『声字義』五二八頁。
（10）『声字義』五三〇～一頁。
（11）『声字義』五三一頁。
（12）小田著『前掲書』二六二頁。
（13）同書　同頁。
（14）小田氏は、内外二色が互いに依正二報となる在り方を「重々の互為依正」という概念で説明しておられる。同著『前掲書』二六三頁、二六五頁。
（15）『声字義』五三二頁。
（16）『声字義』五三二頁。
（17）小田著『前掲書』二六八頁。
（18）『声字義』五三二頁。
（19）小田著『前掲書』二六六頁。
（20）『声字義』五三三頁。
（21）『声字義』五三三頁。
（22）『声字義』五三三頁。
（23）『声字義』五三四頁。
（24）『声字義』五三三～四頁。
（25）小田著『前掲書』二八一頁参照。

キーワード　〈空海、声字実相義、言語論、ことばと存在、六離合釈〉